



K A P P A N O V E L S

長編推理小説 書下ろし

二階堂警部 最後の危

に かい どう

斎藤 栄

お願い――

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。なお、「カッパ・ノベルス」にかぎらず、最近、どんな小説を読まれたでしょうか。また、今後、どんな小説をお読みになりたいでしょうか。読みたい作家の名前もお書きくわえていただけませんか。

どの本にも一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば幸せに存じます。

東京都文京区音羽二の十二の十三

(〒112-11)

光文社「カッパ・ノベルス」編集部

長編推理小説 にかいどう 二階堂警部 ピンチ 最後の危機

1993年6月30日 初版1刷発行

著者	さい 斎	とう 藤	さかえ 栄
発行者	大	坪	昌夫
印刷者	盛	庄	吉

東京都文京区水道2-4-26
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽2 株式会社 光文社
振替 東京6-115347 電話 東京(3942)2241(代)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。(ナショナル製本)
表紙の模様・意匠登録 116613 © Sakae Saitō 1993

ISBN4-334-07046-9

Printed in Japan

〔R〕本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

長編推理小説・書下ろし

に かい どう けい ぶ さい ご ピンチ
二階堂警部 最後の危機

さい とう さかえ
斎藤 栄



カッパ・ノベルス

目次

第一章	鳴川大助 なるかわだいすけ の死	5
第二章	奇々 きき 怪々 かいかい	20
第三章	推理作家登場	41
第四章	捜査の壁	61
第五章	笠間恭一郎 かさまきよういちろう の死	77
第六章	柏木院長の意見	92
第七章	作家探偵	111
第八章	二つの事件	128
第九章	空港の爆発	148
第十章	謎の男	163
第十一章	渋谷 しごや の家	180
終章	どんでん返し	199

本文イラストレーション／加藤孝雄

第一章

鳴川大助なるかわだいすけの死

1

関西に出向してきた二階堂にかいどう警部の住まいは、マンション「リンクス六甲ろっこう」という十二階建てのビルの最上階であつた。

二階堂自身は、できることならもつと安い公営の建物を希望していたのだが、県警側で幹旋あつせんしてくれ
る予定の住まいが、プライバシーが保てないとい
うこともあつたし、また、妻の日美子ひみこは自分の家で、
できることなら、タロットを教えるようなス
ペースも欲しいという希望を持っていたので、ある人の幹
旋で、この「リンクス六甲」に住むことになつたの
である。

鎌倉かまくらの材木座ざいもくざから運んできた荷物を片付けている
と、突然、電話のベルが鳴った。

この電話はまだ友人たちに知らせていないはずな

ので、日美子は、恐らく、自分の夫からの電話だと思つた。

それで、すぐに送受器を手にした。すると、若い女の声が聞こえたのでびっくりした。

「もしもし、日美子さん？」

と、相手は彼女の名を呼んだ。

「ええ、そうだけど」

と、日美子は一瞬びっくりしたが、すぐにその声の主を判別した。

「あつ、あなたは福井^{ふくい}ほのかさん……」

すると、相手の声のオクターブが上がった。

「ええ、そうよ。私よ」

「あら、よくわかったわね、ここの電話番号」

と、日美子は聞き返した。

「ええ。じつは昨日、偶然ご主人に宝塚^{たからづか}の駅のところで会いましたのよ」

「あつ、そうだったの。うちの人は何も言っていな

かったけど、じゃあ、忘れたのね」

「ええ、きつとそうよ。お仕事でお忙しそうだったから。でも、ご主人は私のことを覚えていてくださったわ。だから私、福井ほのかですってご挨拶したら、にっこりお笑いになって、ああ、甘いもののお好きなほのかさんでしようとおっしゃったわ」

「まあ、そうだったの。そんな失礼なことを言ったの？」

「ううん、失礼じゃないわ。だって私、以前一度だけお会いしたときに、甘いものに目がないことをお話した記憶があるもの。たった一回だけなのに、それを覚えていゐるなんて、素晴らしい記憶力ね」

と、ほのかはむしろ感心したように言った。

「それで、どうしたの？」

「ええ、だから、あなたのご主人に、この電話番号を覚えていただいたの」

「ああ、そうだったの」

「昨日のうちにお電話するつもりだったんだけど、ちよつとガタガタしてることがあったものだから」

と、ほのかは言った。

「あなたはやっぱり、宝塚のそばにお住まい？」

と、日美子は聞いた。

「ええ、そうよ。うちからは、直接的には、あの新しくできた宝塚の大劇場は見えないけど、もうちよつとうちを出て歩くと見えるのよ」

と、彼女は言った。

「ほんとう」

「あなたはまだ、新しい宝塚大劇場をご覧になってないでしょう？」

「ええ、まだよ」

「じゃあ、今度、うちへいらっしゃいよ。私が切符を手配しておくわ。なかなか切符って手に入らないのよ」

「そうですね」

と、日美子は言った。

「私、ちよつとしたコネがあるから、その切符を手配することは任せておいて」

「嬉しいわ」

「だけど、あなたまだお引越しでお忙しいんでしょう？」

と、ほのかは言った。

「ええ、まあ……」

日美子は曖昧に答えた。忙しいといえれば忙しいが、別に当面来客があるわけではなく、日美子はゆつくりと片付け事を楽しんでいたのである。

「そこはマンションなんでしょう？」

「ええ、そうよ」

「警察の人ばかり？」

「ううん。一般のマンションだからそんなに気にしないで、あなたもこちらに遊びにいらっしゃいよ」

と、日美子は言った。

「ええ、伺うわ。詳しいことは知らないんだけど、

どうして鎌倉から神戸のほうに引っ越してくるようになったの？」

と、ほのかは聞いた。

2

ほのかの質問は、当然だったかもしれない。何しろ神奈川県警で、その活躍ぶりを知られている日美子の夫・二階堂警部は、いろいろな事件でほのかの耳に、その様子が伝わってきていたのである。それが突然、兵庫県警に移ってしまったということは、ちょっと理解しにくかったのであろう。

日美子は、電話であまり詳しく言うつもりがなかったので、

「ええ、お仕事の都合なのよ。詳しいことは、またお会いしたときにお話しするわ」

と、それだけ言った。

「そう。男の人って、なかなか大変ね」

と、ほのかは、少しため息をついたように言った。

そこで、日美子は、ふっとほのかのことを考えた。

彼女は、まだ独身のはずであった。

それで、念を押すように日美子が聞いた。

「あなたは、まだお一人？」

すると、ほのかは電話の向こうでかすかに笑ったような気がした。

「私、結婚したのよ」

と、ほのかは言った。

「本当、それはおめでたいじゃないの。でも、なぜ知らせてくださらなかったの？」

と、日美子は、少し非難めいた言い方をした。

「それは、あなただけじゃなくて誰にも言わなかったの。まだ、結婚といっても籍も入っていないし、一緒に住み始めただけなんですもの」

「そうなの。どういふ方？」

日美子は、続けて聞いた。

心の中では、

（ああ、籍も入っていないというんだから、きっと結婚式もしていないんでしょう。何か事情があるのかもしれないわ）

と、思った。

「名前は鳴川大助というんだけど、この宝塚で鳴川ファイナンスという金融の仕事をしているのよ」

「金融？」

と、日美子は、もう一度聞き返した。

「ええ。本人は不動産や、その他たくさんさんの資産を持っていて、お金を動かすことに趣味があるのね。」

鳴川の父親の代からそうなんですって」

と、言った。

ズバリ言えば、ほのかの結婚相手は金融業者なのである。もっと平たく言えば、恐らく、個人的な金

貸しなのではあるまいか。

日美子はそう思い、かつ、ほのかがあまりそういう事情を詳しく言いたがっていないような気配を感じた。それで、この話題を彼女のほうから転換しようと思った。

「じゃあ、あなたもなかなかお忙しくて大変でしょう、一人のときと違って」

「そりゃあ、そうよ。でも、鳴川は優しいし……」

と、ほのかは口を滑らせるように言った。

「そりゃあ、そうでしょう。どうも御馳走さま」

と、日美子は言った。

「そんなじゃないんだけど、でも、日美子さん、関西へいらっしゃったんなら、まず第一に宝塚の私のうちに遊びに来て」

と、ほのかは言った。

（もしかしたら、この人は寂しいのかもしれない）と、日美子は感じた。理由は、よくわからなかつ

たけれども。

「ええ、伺うわ」

と、彼女は答えた。

そのときの電話は、それで終わった。

3

武庫川^{むこがわ}沿いの道を、ほのかは自宅に向かつて歩いていた。日美子に電話した翌日のことである。

出かけていて、デパートの入口にある公衆電話から自宅へ電話をかけたとき、たまたま鳴川大助がいて、

「すぐにうちへ帰ってきてくれないか」

と、言ったのである。

ほのかは、突然のこの大助の言葉にびっくりした。「どうして？　あと三十分ぐらい買物したいんだけど」

「いや、そうはいかない。急用があるんだ。うちへ帰ってきなさい」

いつになく、大助の厳しい言葉だった。

大助との生活は、ここ一年來のものである。正式な結婚はしているわけではないが、自分では正式の妻という自信があった。

とにかく大助は優しく、しかも、金離れのいい男だった。まあ、欠点といえば、仕事が忙しくて、うちにいるのが月に十日足らずという状態ではあったが、それなりにきちんとしている。

ただ、仕事のことに口を出すと、ひどく怒られることはあったが、それは男の人として当然だと思っていた。

とにかく、至急帰ってこいと言うので、ほのかは、何となく胸騒ぎがして急ぎ足で帰りつつあった。

あと四、五分で大助との愛の巢に戻れるというところで、横合いから出てきた若い男に会った。

「あっ！」

と、ほのかは言った。

その男は、鳴川ファイナンスの従業員だという下井保いたちだった。

ほのかは、鳴川のしている仕事、特にその鳴川ファイナンスについては、その所在も知らない。しかし、時折り自宅を訪ねてくる下井保というその青年は、鳴川ファイナンスの従業員だということを、鳴川自身から紹介されている。

非常に菌切れのいい男で、ほのかは、この男に好感も抱いていたのである。

「奥さん、今お帰りですか」

と、下井が言った。

「ええ」

と、彼女は頷いた。

「ご主人……いや、社長のことなんですが」

「社長がどうしたの？」

下井は、鳴川のことを社長と呼んでいた。

「いらっしやいますか？　ちよっとお会いしたいんです」

「いると思うわ。さっき電話でしゃべったときに、いえ、私がデパートに行って、うちへ電話をかけたの。そうしたら、すぐ帰ってこいって言うのよ。だから、いるでしょう」

「ああ、よかった。ちよっと社長に仕事のことと話があつて」

と、下井は言った。

「それじゃあ、一緒に行きましょう」

と、ほのかは、彼を誘うようにして自宅へ急いだ。

4

ほのかが鳴川大助と所帯を持ったのは、この武庫川沿いの一軒家であった。

新築の家ではなく中古だが、それでも、今どき平家で、敷地面積が三百平方メートル以上はあるという庭付きの家は、そうそう手に入るものではなかった。

鳴川は、いずれもっと大きな家に引越すつもりで、今、土地を探していると、ほのかに言っていた。それでも、ほのかは、その鳴川の言葉を信じ、さらに発展することを楽しみにしながら、その一軒家に住み、留守がちな鳴川との生活を守ってきたつもりだった。

ほのかが鳴川を知ったのは、彼女が宝塚のスナックに勤めていたときに、鳴川が一人でブラッとそこに入ってきたことに始まる。

鳴川は、一目ほのかを見ると、

「お嬢さんは、僕の初恋の人に似ている」

と、話しかけて意気投合し、それから二人は酒を飲んだが、その帰り、鳴川は宝石店に寄って、彼女

に百万円のサファイヤの指輪を買ってくれたのである。

「こんな小さなものですまないが、僕の気持ちだから」

と、鳴川は言った。

全く、鳴川は金離れがいい男だった。

そして、再会を約束して別れた。その後ろ姿に、すっかりほのかは参ってしまったのである。

結婚願望の強かったほのかは、一人住まいの寂しさをこれで解消できると思い、鳴川の言うままに、この一軒家に来て、彼と所帯を持つことになったのである。

自宅の正面の門は閉まっていたが、裏木戸は開いていた。鳴川がいるはずだから、これは当然である。ほのかの後ろから、下井も続いて入ってきた。

ほのかは家の中に入り、「ただいま」と声をかけた。だが、家の中からは何の反応もなかった。



この家は、先ほども言ったように平家である。広さは、今風に言えば3DKになっていた。

彼女は、ダイニングルームへ入って行つた。すると、その床の上に、崩れるように倒れているワイシャツ姿の鳴川大助を見つけた。

「どうなさつたの？」

と言いながら、ほのかは駆け寄つた。

大助は、横向きになって倒れていたが、その背中には真っ赤な血の染みがあった。

下井も、続いて後から入ってきた。

「あなた、しっかりして！」

と、ほのかは叫ぶように言つた。その声は、全く悲鳴としか言いようのないものであつた。

「いけない。社長は死んでいる」

と、下井が言つた。

ほのかは反射的に鳴川の手をつかみ、ギョツとした。本当に、氷のように冷たかつた。

「どうしよう」

と、ほのかは言つた。真っ青になって、自分でも体がガクガク震えるのを感じた。

その点、下井は男だけに、彼女よりしっかりしたことを言つた。

「警察へ知らせなきゃ。これは、殺されたんですよ。見てごらんさい、血が胸と背中から出ている。」

どこかで誰かに撃たれたんじゃないですか。弾が背中に抜けているようだ。ワイシャツがそこだけ破れている」

と、言つた。

すべて、下井の言うとおりであつた。

「助けたいわ、何とかならない？　ねえ、お願い」

と、ほのかは、自分でも脈絡のないことを承知で言つた。

「とにかく、救急車を頼んでみましょう。これだけ冷たいと、もう駄目だと思うけど」

そう言って、下井は続けて、

「電話機はどこでしたか？」

と、言った。

「あ、向こうの部屋」

と、ほのかは言った。

「どこですか？　まず、この場所の説明もしなきゃいけないし、僕も一緒に行きますから、奥さん、電話をかけてください」

と、下井が言った。

「ええ。そうしますわ」

「一一九番ですよ。一一〇番は警察だから。いずれかけなきゃいけないかもしれないが、とにかく一一九番を」

と、言った。

二人はすぐ隣りの部屋に駆け込んだ。

ほのかは、震える指先で、一一九をブッシュした。

すぐに、男の声が聞こえた。

「大変です、主人が死にそうです！」

と、ほのかは言った。

すでに冷たくなって、死んでいる恐れはあったが、しかし、死んでいるとは口にしたくなかった。

「どんな具合なんですか？　落ち着いて話してください」

と、救急センターの係員の声が聞こえた。

「あのおう、銃で撃たれたみたいなんです」

ほのかは、下井の言うように、状況を説明した。

「銃で撃たれた？　どこをですか」

問い返してくる男の声が、どこか悠長な気がして、ほのかは気が気ではなかった。

「胸です、胸をやられているんです。背中にも血がいつぱいで……」

「ほう、そうすると、胸から背中にかけて、弾が貫通しているんですか？」

実際は、ほのかにはよくわからなかった。しかし、